

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25285178

研究課題名(和文) SNS上での国際交流プログラムの開発とその効果の検討

研究課題名(英文) The development and evaluation of International friendship programs carried out using an SNS

研究代表者

坂元 章 (Sakamoto, Akira)

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：00205759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、SNS上での国際交流が偏見低減に及ぼす影響を検討した。研究1において4波WEB縦断調査を実施し、外国人利用者と直接SNS上でやり取りする直接接触だけでなく、自身の友人が外国人とSNS上で交流する間接接触によっても偏見低減効果が示された。研究2として、SNS上での国際交流プログラムを実施し、その教育効果を実験により評価した。その結果、統制群よりも直接接触群、間接接触群の方が、また間接接触群よりも直接接触群の方が外国人に対するイメージが改善することが示された。一方で、交流に関する知識を事前に習得する効果は見られず、交流に際して事前の準備等がなくとも十分な効果が得られることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated the influence of international exchange via Social Networking Services (SNS) on reducing prejudices. In study 1, we conducted a four-wave Web-based longitudinal survey, and this showed that prejudice was reduced not only by direct contact interacting with foreign users via SNS but also by indirect contact through one's friends interacting with foreigners.

In study 2, we conducted an international exchange program via SNS, and evaluated its educational effects through experimentation. The results showed that one's impression of foreigners improved more for the direct-contact and indirect-contact groups than for the control group and more for the direct-contact group than for the indirect-contact group. On the other hand, the prior acquisition of knowledge regarding interaction appeared to have no effect, and this suggests that sufficient effects may be achieved even with no preparation prior to the interaction.

研究分野：社会心理学

キーワード：SNS インターネット 国際交流 異文化間コミュニケーション 縦断調査 教育プログラム 自動翻訳

## 1. 研究開始当初の背景

SNS(social networking service) は世界各国からの登録者と同じ関心を持つ「友人」として付き合える上、自動翻訳機能が実装されており、対面での交流と比べ、言葉の壁が障壁となりにくく、外国の人との友人関係を築きやすいという偏見低減に有効な要素を備えている。

加えて、SNS の持つ以下の 2 つの特性によって、偏見低減効果を強く期待できる。第一の特性として、SNS 上では外国人との友情関係を築く機会が提供されやすいことが挙げられる。自分とは異なる集団(外集団)に属するメンバーとの友好を高めるためには、接触が不可欠であるという接触仮説(Allport, 1954)は、その後、様々な研究でその有効性が確認されてきた(Pettigrew & Tropp, 2006)。この接触の効果は、相手と友情関係を築くことでさらに強化される(Pettigrew, 1998; Turner et al., 2007)。SNS 上のコミュニティの中では、共通の趣味や関心を持つ者同士が集まるため、相手を外国人だと意識せず、同じ関心を持つ「個人的な友人」としての付き合いができる。このような友情関係を育む機会を提供する SNS 上での外国人利用者との接触は、外国人に対する偏見を低め、友好を高めることが期待される。第二の特性として、SNS 上では、直接外国人と接する「直接接触」だけでなく、「間接接触」が生じやすいことが挙げられる。最近の接触仮説の発展において、自分が直接外集団成員と接しなくても、自分と同じ内集団成員が外集団成員と接触する場面を目撃すること(代理接触 vicarious contact)や、両者が友人関係にあることを知ること(拡大接触 extended contact)が、偏見低減に有効であることが示され始めている(Dovidio et al., 2011)。このような間接接触は、直接接触が起こらない状況において特に効果があり(Eller et al., 2012)、集団間が分断された状況での有効性が期待されている(Turner et al., 2007)。SNS では、自分の友達がどんな人とやり取りしているか、誰と友達登録をしているか見ることができる。したがって、対面以上に間接接触を経験する機会を多く提供できる SNS は、偏見低減をもたらす国際交流に有効なツールであると言える。

## 2. 研究の目的

上述の通り、SNS は国際交流の場としての活用が期待されるが、SNS 上での国際交流による偏見低減効果を実証的に検討した研究は見当たらない。そこで本研究では、SNS 上での交流の有効性を明らかにするために、2 つの研究を実施した。

研究 1 として、4 波 WEB 縦断調査を実施し、自然場面における SNS 上での国際交流が偏見低減効果をもたらすかを検討した。また、研究 2 として、SNS 上での国際交流プログラムを実施し、その教育効果を実験により評価した。

## 3. 研究の方法

### 3.1 研究 1: 4 波パネル調査

研究 1 として、自然場面における SNS 上での国際交流が偏見低減効果をもたらすかを検討するために、4 波パネル縦断調査を実施する。さらに SNS 上での国際交流の妨げとなりうる利用の文化差等の要因についても調べる。

#### (1) 目的

SNS 上での交流を阻害する要因の検討

SNS の利用について米・中・印では個人情報の公開や実名利用に文化差があること(Wang et al., 2011)や、米韓の利用者で見知らぬ相手と SNS 上で関係形成を望むかに違いがあることが示されている(Kim et al., 2011)。このような SNS 利用の文化差が誤解や対人トラブルを招き得る。しかし、SNS 上での外国人利用者とのトラブルには、a) SNS 利用の文化差だけでなく、b) 顔の見えない SNS 上でのコミュニケーションゆえの齟齬や、c) 文化的背景の異なる外国人とのコミュニケーションに由来する齟齬も原因として存在するだろう。調査対象者に、SNS 上で外国人利用者との間にどのようなトラブルが発生しているのか尋ね、上記の 3 つの観点で回答を分類し、SNS 上での国際交流の妨げとなりうる要因を検討する。

自然場面における SNS 上での国際交流による偏見低減効果の検討

上述の通り、自動翻訳機能を搭載し、共通の趣味や関心を持つ者同士が繋がりがやすく、他者の人間関係のネットワークが見えやすいという特徴を持つ SNS は、友好的な国際交流の場として適していると考えられる。しかし、SNS 上での接触による偏見低減効果を検討した先行研究は見当たらない。そこで本研究では、自然場面における SNS 上での直接接触経験や、間接接触経験が、外国の人々に対する態度に及ぼす影響を検討することを目的とする。

#### (2) 調査対象者

2013 年 12 月に WEB 調査会社のモニター登録者 153,259 名を対象に SNS 利用経験や SNS 上での外国人利用者との直接・間接接触経験を尋ねるスクリーニング調査を実施し、50,116 名から回答が得られた。

スクリーニング回答者の中から、日本国籍保有者で、SNS 上で外国人利用者と接触したことがあると回答した 4,714 名に対して SNS 上での外国人利用者とのトラブルに関する質問への回答を求めた

またスクリーニング調査回答者の中から、日本国籍を保有し、最近 1 か月に SNS 利用経験がある人を対象に、SNS 上での外国人利用者との直接・間接接触経験に偏りがでないよう人数のバランスを取った上で、4,886 名に 1 波目(T1)の本調査を 2014 年 1 月に依頼した。

その結果 3,100 名から回答が得られた。2 波目以降は前調査の回答者に調査を依頼し、2 波目調査(T2; N=2,371)を同年 7 月に、3 波目調査(T3; N=2,097)を 2015 年 2 月に、4 波目調査(T4; N= 1,848)を同年 8 月に実施した。全調査に参加し、各調査で最近 1 か月間に SNS を利用していると回答、性別・年齢に矛盾がない 1,597 名(男性 1,000 名、女性 597 名)を分析対象とした。

### (3) 調査項目

最近 1 カ月の SNS の利用状況や年齢・性別等に加え、以下の項目等を尋ねた。

SNS 上での外国人利用者とのトラブル  
これまでに SNS の中で外国の人とトラブルになったことがあるか、ある場合にはトラブルの内容について詳しく記述するよう求めた。

#### 外国人イメージ

村田 (2007)をもとに、外国の人全般に対するイメージについて、好感度を「好ましい—好ましくない」等 4 項目で、知的能力を「頭がよい—頭が悪い」等 3 項目で、両極形容詞対を呈示し測定した。回答は、0 から 100 までの間で、持っている印象やイメージに近い部分まで、スライダーを動かすよう求めた。100 に近いほど、肯定的なイメージを持つことを意味する。各尺度項目の平均値を各外国人イメージ得点(好感度・知的能力)とし、全項目の平均値を全体得点とした。

#### 直接接経験

接触頻度:最近 1 か月間の SNS 上での外国人利用者との接触頻度(0:ここ 1 か月は接触していない~5:毎日)を尋ねた。

接触人数:最近 1 か月間に直接 SNS 上で接触した外国人利用者の人数を尋ねた。

#### 間接接経験

接触頻度:最近 1 か月間に SNS 上で日本人の友達が外国人の友達とコミュニケーションをしている場面を目撃した頻度(0:ここ 1 か月は目撃していない~5:毎日)を尋ねた。

接触人数:SNS 上の日本人の友達の中で、SNS 上で外国人の友達がいる人の数を尋ねた。なお、接触人数について、データの範囲が大きく、また外れ値も多く含まれていたため、Turner et al.(2008)で用いられた 5 件法(0:なし、2:1 人、3:2 人以上 5 人未満、4:5 人以上 10 人未満、5:10 人以上)に変換したデータを分析に用いた。

## 3.2 研究 2: SNS 上での国際交流プログラムの教育効果の検討

研究 2 として、SNS 上での国際交流プログラムを実施し、その教育効果を実験により評価した。

### (1) 目的

自動翻訳システムの選択と国際交流プロ

### グラムの開発

上述の通り、SNS は国際交流に適した場であることが期待される一方で、SNS 利用に関する文化差や、翻訳精度の問題による誤訳が、相互の誤解や対人トラブルを招き得る。そこで、本研究では、まず、交流が可能な翻訳精度を持つ自動翻訳システムを選定し、交流中の障壁となりうる要因を事前に交流参加者に伝達することでその問題に対処できるようにするプログラムを開発した。

#### 実験室実験による教育効果の検討

で開発した国際交流プログラムが、SNS 上での交流効果を高めるかどうかを検討する。研究 1 では、自然場面での SNS 上の交流を対象にしており、自発的に交流に参加している人の接触効果を検討していた。研究 2 において、大学生を対象に実験場面での SNS 上の交流を扱い、交流に参加するように促された対象者であっても、同様の偏見低減効果が見られるのかを確認した。

### (2) 対象者

自動翻訳システムの選択と国際交流プログラムの開発

中国人・韓国人留学生各 2 名に、4 つの自動翻訳システムを介して翻訳された文章を評価してもらった。さらに、予備実験として、選定された翻訳システムを搭載した SNS 上での交流に日本人女子学生 6 名と韓国人女子学生 2 名が参加した。

#### 実験室実験による教育効果の検討

2015 年 11 月~2016 年 1 月に、18~24 歳の女子大学生および大学院生 99 名を対象に、自動翻訳機能を搭載した SNS 上での 3 週間の交流実験を行い、全ての手続きに参加した 96 名を分析の対象とした。交流相手には韓国人留学生 7 名が実験協力者として参加した。

実験参加者は、実験協力者である韓国人留学生と交流をする直接接群と、それを目撃する間接接群、交流をしない統制群にランダムに分けた。さらに、直接接群は、事前に交流に際しての知識を習得する A 群と習得しない B 群に、間接接群は、A 群を目撃する a 群と B 群を目撃する b 群に分けた。加えて統制群を C 群とする。

### (3) 手続き

自動翻訳システムの選択と国際交流プログラムの開発

まず、交流が実現可能な自動翻訳システムを選定するために、中国語・韓国語と日本語を自動翻訳する 4 つのシステムを介して翻訳された文章を、中国人・韓国人留学生各 2 名に読んでもらい、翻訳精度を評価してもらった。また、研究チームのメンバーも、留学生が書いた文章を上記のシステムを通して日本語に翻訳された文章を読み、翻訳精度を評価した。その結果、交流が十分に可能な翻訳

精度を持つ自動翻訳システムとして、日韓自動翻訳プラットフォーム(株式会社高電社)を1つ選定し、その翻訳システムが搭載されたSNSを研究に利用することとした。なお、SNS(SKIP;株式会社ソニックガーデン)は今回の研究のためにカスタマイズされ、研究協力者・参加者のみがアクセスできる設計となっていた。

予備実験としてこのSNSを利用した交流を試みた。交流後、交流の感想の他、交流参加にあたって事前に知っておきたかったこと、実験者側が設定した交流時間の長さ、交流が成功するために気を付けること(誤訳を少なくする、多くの人からコメントをもらう)について、参加者に尋ねた。

研究1で回答された自然場面におけるSNS上のトラブルや予備実験で得られた内容をもとに、円滑な交流の実現可能性を高めるために、交流前に参加者に伝達する情報をテキストとしてまとめた。すなわち、誤訳を防ぐ入力の方法として、書きことばで省略のない完全な文章にすること、固有名詞はアルファベットで入力すること、漢字の言葉は漢字で入力すること、一文は短く、簡潔にすることの4つの方法を伝える内容を含めた。また、上記の点に気を付けて入力しても、誤訳が起こりうること、誤訳が起きた時にどのように対処すべきかについても伝え、実際に相手の文章がわからなかった時にどう対応するかの練習ができる機会も設けた。さらに、Bryant & Marmo(2012)のSNSのコミュニケーションルールに関する研究知見に基づき、SNSでの相互作用が活発になるためのコツとして、明るく楽しい内容、誠実で正直な内容の投稿を心掛けること、相手は返事を待っていることについても伝える内容とした。

#### 実験室実験による教育効果の検討

直接接触群は1日30分SNSへの書き込みおよび閲覧を、間接触群は1日20分SNSの閲覧を行った。全員が交流の前後で態度等に関する質問に回答したが、A群にのみ、交流開始前に態度等を測定した後、事前知識を伝達し、その後、すべて事前知識を習得しているかを確認した。習得していなかった場合には、もう一度テキストを見直し、再回答を求めた。

#### (4)質問項目

以下の項目等を測定した。

外国人イメージ尺度：上述の縦断調査で用いた項目と同じ項目を用いた。

接近回避尺度：小池・酒井(2010)の「日本で勉強している韓国人と友だちになりたい」等の7項目を5件法で測定した。尺度を使用する際には、実験の内容に合わせて「韓国人」の文言を適宜追加・変更した。

## 4. 研究成果

### 4.1 研究1 4波パネル調査

(1)SNS上での国際交流時のトラブルの分析  
無回答やトラブルの経験がないと回答した者を除いた251名の257件(1人で複数のトラブルを記述した回答者が含まれるため)の回答を分類の対象とした。さらにトラブルの内容について記載されていない回答、説明不足のため分類ができない回答17件を除いた240件を非常に類似したものを集め28個の小カテゴリーに分類した。その後、小カテゴリーをa)SNS利用の文化差、b)SNS上のコミュニケーション、c)異文化コミュニケーションの3つの観点に基づく7つの大カテゴリーに分類した。分類の結果、a)SNS利用の文化差、b)SNS上のコミュニケーション、c)異文化コミュニケーションのそれぞれに由来するトラブルが発生する可能性があることが示された。

(2)SNS上での国際交流による偏見低減効果：T1からT4にかけての長期的影響の検討  
分析モデル

SNS上での外国人との接触が外国人態度に及ぼす影響について交差遅れ効果モデルに基づいて共分散構造分析を行った(図1)。

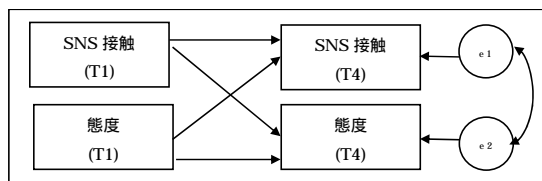


図1 T1とT4のデータを用いた分析モデル図

#### 分析結果

外国人利用者と直接SNS上でやり取りする『直接接触』だけでなく、自身の友人が外国人と交流する『間接触』も、外国人に対する好感度、知的能力に関するイメージを改善することが示された。すなわち、SNS上で外国人利用者と関係を持つ自身の日本人の友人数が多いほど、また、その友人が外国人利用者とSNS上でやり取りをしている場面を目撃する数が多いほど、外国人に対する態度が改善した。

(3)SNS上での国際交流による偏見低減効果：T1~T4データを用いた分析

#### 分析モデル

前項で行った分析はT1とT4の変数のみを用いて、T1からT4にかけて、SNSでの接触が外国人に対するイメージを改善するかどうかを目的に分析を行った。本項ではT1~T4の全時点での変数を用いて、交差遅れ効果モデルに基づく共分散構造分析を行い(図2)、各時点間でどのような変化があるのかを検討した。

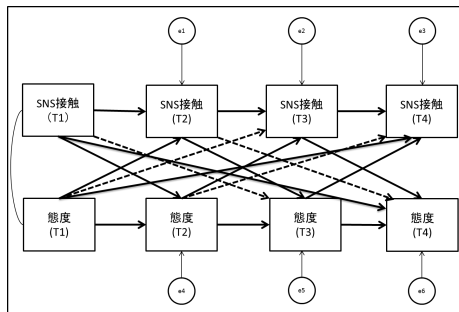


図2 4時点のデータを用いた分析モデル図

### 分析結果

接触に関する測度が外国人に対する態度に及ぼす影響について、短期間(例：T1→T2や、T2→T3)の有意な効果は見られたものの、長期間(T1→T4)にわたる効果は見られなかった。したがって、前項で得られたT1からT4にかけての長期的な影響は、SNS上での接触が外国人に対する態度を改善する短期的な効果が累積した結果得られた効果であると示唆される。

### 4.2 実験室実験

#### (1)5条件間の比較

実験場面におけるSNS上での直接・間接接触の偏見低減効果、また交流に関する事前知識習得の効果を検討するために、以下の仮説に基づき分析を行った。

仮説1：実験群(A群、B群、a群、b群)は、統制群に比べて態度がよりポジティブに変化する。

仮説2：直接接触群(A群、B群)は、間接接触群(a群、b群)に比べて態度がよりポジティブに変化する。

仮説3：A群は、B群に比べて態度がよりポジティブに変化する。

仮説4：a群はb群に比べて態度がよりポジティブに変化する。

仮説1では好感度、接近回避尺度において、実験群の方が変化量の値がより高くなり、SNS上での直接接触と間接接触による効果が示された。仮説2では、好感度において、直接接触群の方が変化量の値が高くなり直接接触の効果がより強いことが示された。仮説1と2が支持されたことから、自動翻訳付きのSNSであっても交流およびその交流の目撃によって外国人に対する態度が改善されることが明らかとなり、自動翻訳を介したSNSでの交流の有効性が示唆された。

なお、仮説3、仮説4では有意な結果は得られず、事前の知識習得の効果はみられなかった。したがって、交流に際して事前の準備等がなくとも十分な効果が得られることが示唆された。

### 引用文献

Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Perseus Books

(G.W.オルポート 原谷達夫・野村昭(訳) (1968). *偏見の心理* 培風館

Bryant, E.M., & Marmo, J. (2012). The rules of Facebook friendship: A two-stage examination of interaction rules in close, casual, and acquaintance friendships. *Journal of social and personal relationship*, **29**, 1013-1035.

Eller, A., Abrams, D., & Gomez, A. (2012). When the direct route is blocked: The extended contact pathway to improving intergroup relations *International journal of intercultural relations*, **36**, 637-646.

Dovidio, J. F., Eller, A., & Hewstone, M. (2011). Improving intergroup relations through direct, extended, and other forms of indirect contact. *Group Processes & Intergroup Relations*, **13**, 147-160.

Kim, Y., Sohn, D., & Choi, M. (2011). Cultural difference in motivations for using social network sites: A comparative study of American and Korean college students. *Computers in Human Behavior*, **27**, 365-372.

小池 浩子・酒井 英樹 (2010). 接触の度合いと外国人に対する態度 信州大学教育学部研究論, 1, 87- 98.

村田光二 (2007). アテネ・オリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響, 平成16年度~平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(c))研究成果報告書, 課題番号: 16530398

Pettigrew, T.F. (1998). Intergroup contact theory. *Annual Review of Psychology*, **49**, 65-85.

Pettigrew, T.F. & Tropp, L.R. (2006). A meta-analytic test of intergroup contact theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**(5), 751-783.

Turner R.N., Hewstone M., Voci A., Paolini S., & Christ O. (2007). Reducing prejudice via direct and extended cross-group friendship *European review of social psychology*, **18**, 212-255.

Turner, R. N., Hewstone, M., Voci, A., & Vonofakou, C. (2008). A test of the extended intergroup contact hypothesis: The mediating role of intergroup anxiety, perceived ingroup and outgroup norms, and inclusion of the outgroup in the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **95**(4), 843-860.

Wang, Y., Norcie, G., & Cranor, L.F. (2011). Who is concerned about what? A study of American, Chinese and Indian Users' privacy concerns on social network sites. *Trust and Trustworthy Computing*, **6740**, 146-153.

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計15件)

寺本水羽・松尾由美・渋谷恵・岩坪千晶・田島祥・坂元章 自動翻訳を介したSNSでの国際交流が相手国の人々への態度に与える

影響(1): 直接接触・間接接触・事前知識獲得効果 日本社会心理学会第57回大会, 2016年9月17~18日, 関西学院大学(発表予定)

松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・渋谷恵・坂元章 SNS上での間接接触が外国人イメージに及ぼす影響(2): 3波縦断調査による検討 日本社会心理学会第57回大会, 2016年9月17~18日, 関西学院大学(発表予定)

寺本水羽・松尾由美・渋谷恵・岩坪千晶・田島祥・坂元章 自動翻訳を介したSNSでの国際交流が相手国の人々への態度に与える影響(2): 集団間不安による媒介効果の検討 日本パーソナリティ心理学会第25回大会, 2016年9月14~15日, 関西大学(発表予定)

松尾由美・寺本水羽・渋谷恵・岩坪千晶・田島祥・坂元章 自動翻訳を介したSNSでの国際交流が相手国の人々への態度に与える影響(3): 新奇恐怖の調整効果の検討 日本パーソナリティ心理学会第25回大会, 2016年9月14~15日, 関西大学(発表予定)

Mizuha Teramoto, Yumi Matsuo, Sachi Tajima, Kei Shibuya, Chiaki Iwatsubo, Akiyo Shoun, Mari Aita, & Akira Sakamoto The influences of contacts via SNS on the attitudes toward foreign people: Study on the intergroup anxiety's mediation effect. 31<sup>st</sup> International congress of psychology, 2016年7月24-29日, パシフィコ横浜(発表予定)

Yumi Matsuo, Sachi Tajima, Mizuha Teramoto, Akiyo Shoun, Mari Aita, Kei Shibuya, & Akira Sakamoto Effects of intergroup contact via SNS on prejudice toward foreign people 31<sup>st</sup> International congress of psychology, 2016年7月24-29日, パシフィコ横浜(発表予定)

Yumi Matsuo, Sachi Tajima, Mizuha Teramoto, Akiyo Shoun, Mari Aita, Kei Shibuya, & Akira Sakamoto Mediated effects of intergroup contact via SNS and face to face international communication on attitude toward foreign people. 31<sup>st</sup> International congress of psychology, 2016年7月24-29日, パシフィコ横浜(発表予定)

松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・渋谷恵・坂元章 SNS上での間接接触が外国人イメージに及ぼす影響 日本社会心理学会第56回大会, 2015年11月1日, 東京女子大学

寺本水羽・松尾由美・田島祥・渋谷恵・祥雲暁代・相田麻里・坂元章 SNS上での外国人との接触が外国人に対する態度に与える影響— 集団間不安の調整効果の検討 — 日本社会心理学会第56回大会, 2015年11月

1日, 東京女子大学

松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・渋谷恵・坂元章 SNS上での外国人利用者との接触と外国人イメージに及ぼす影響 日本心理学会第79回大会, 2015年9月22-24日, 名古屋国際会議場

寺本水羽・松尾由美・田島祥・渋谷恵・祥雲暁代・相田麻里・坂元章 2因子集団間不安尺度の改訂 - 信頼性と妥当性の検討 - 日本パーソナリティ心理学会第24回大会, 2015年8月21-22日, 北海道教育大学

寺本水羽・松尾由美・田島祥・祥雲暁代・相田麻里・坂元章 日本語版2因子集団間不安尺度の構造-Greenland et al.(2012)にもとづいて- 日本パーソナリティ心理学会第23回大会, 2014年10月4-5日, 山梨大学

松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・坂元章 SNS上での外国人利用者との接触と外国人イメージとの関係 日本心理学会第78回大会, 2014年9月10-12日, 同志社大学

松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・坂元章 SNS上での外国人利用者との接触と外国人イメージとの関係(2) 日本グループ・ダイナミクス学会第61回大会, 2014年9月6-7日, 東洋大学

松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・坂元章 SNS上での外国人利用者とのトラブル分析 日本社会心理学会第55回大会, 2014年7月26-27日, 北海道大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂元章 (SAKAMOTO, Akira)  
お茶の水女子大学・基幹研究院・教授  
研究者番号: 00205759

### (2) 研究分担者

長谷川 真里 (HASEGAWA, Mari)  
横浜市立大学・都市社会文化研究科・教授  
研究者番号: 10376973

向田 久美子 (MUKAIDA, Kumiko)  
放送大学・教養学部・准教授  
研究者番号: 10376973

田島 祥 (TAJIMA, Sachi)  
東海大学・チャレンジセンター・講師  
研究者番号: 60589480

松尾 由美 (MATSUO, Yumi)  
関東短期大学・こども学科・講師  
研究者番号: 50711628